

近代の観察

1. 近代社会の近代的なるもの

ニクラス・ルーマン著

館野 受男訳

はじめに

本稿は Niklas Luhmann, *Beobachtungen der Moderne*, Opladen, Westdeutscher Verlag, 1992 の第1章 *Das Moderne der modernen Gesellschaft* を訳出したものである。もともとルーマンのこの書物は各地の学会における講演に加筆してまとめたもので全部で5章からなっている。今回のこの部分はフランクフルト社会学大会（1990年）の講演が基本となっている。ルーマン（1927年生まれ、ビーレフエルト大学教授、1989年ヘーゲル賞受賞）についてはあらためて紹介するまでもなく、システム理論的な社会学の構想者としても、夙に高名である。コミュニケーション的行為論から社会理論を構想するハーバーマスとなにかと対比されることが多い。システム理論とか、コミュニケーション的行為論といえは、外からの超越的な批評をよび起しがちなのだが、しばらくその言うところに耳をかす必要もあろう。モデルネは近代でもあり現代でもある。近・現代とするのも面白いが、訳語として近代をとった。専ら煩をさけるためである。哲学の任務が時代を思想においてとらえること（ヘーゲル）とすればポストモダン—モダン論争に無関心ではありえないし、なによりもルーマンの概念装置や思想の射程をうかがうことができる恰好な主題であると思われる。

原文のイタリックの部分の訳語には傍点を、原文“……”の部分には“……”を付した。

I.

私はここで展開される近代社会の近代性についての分析を、社会構造と意味論の区別からはじめる。この出発点に関する私の選好は——当初は確かに正当化されえないような選好ではあるが——この区別の混乱した性質、つまり、区別が区別自身を含んでいることとかかわりがある。区別は意味論上の区別でさえある。同じように、観察から区別は生じるのであるが、操作と観察を区別することは、観察者を区別することですらある。私はこのことについては、この指摘にとどめておく。そして、この論理形式は、そのパラドックスが展開する分析の有効性の基礎をなしているという素朴な主張¹についても、ここではこれ以上ふれないでおく。それに加えて、この出発点は、中心にすでに近代についての全体理論を含んでいる。なぜなら、この分析は真であることが確証された自然法則を承認することをもってはじめるのではなく、理性原理によるのでもなく、またすでに確証され、あるいは争いの余地のない事実をもって開始するのでもない。分析はそれぞれ別の仕方で、さらに解決されなければならないパラドックスをもって開始するのであり、人びとは無限な情報を有限な情報負荷に還元しようとする。分析は従って自分自身のために、その対象の特徴：近代性をとりもどすよう要求する。

社会構造と意味論の区別によって開始するとすれば、社会学者の注意を集めることになるのは、近代についての論争がさらに意味論のレベルに導かれるということである。² “資本主義社会”についての議論が解説を必要とするようになって、そして“差異化”についての論議が、あまりに一般的な仕方で試みられたために停滞して以来、近代の特質を適切に構造的に記述することが不十分なものとなる。近代の概念は、そうしたわけでその現実の形勢を、経済から文化へと重心を移動させることによって手に入れる。けれどもこの文化自身が説明を必要とするであろう。かくして近代を特徴

づける試みの中で、社会の自己記述というレポーターからでてくる特性があげられる。これは、例えば、近代の概念は理性による啓蒙という観念世界と連合していると思われている。同様に、社会の近代性は、社会が自己規定的個人に対して配分する意味によって規定されていると考える場合にも、このことはあてはまる。二つの観点で、今日、長い失望の一覧表がある。デリダは最近、“近代性についての伝統的論考”の“終りかさもなければ死への好み”について語っている。³これに応じて足どりも軽く、記述は近代からポスト近代へと転換される。それと共に未来像が変わる。いわゆる古典的な近代はその期待の実現を未来へ移管し、そして同時に社会の自己観察と自己記述のすべての問題は、未来という“まだないもの”によって除去されるのに対し、ポスト近代の論争は未来なしの論争である。そしてここではしたがって、システムの記述をシステムの中で行う（自分自身を同時に記述する記述）といったパラドックスと同じ問題が別の仕方でも解決されなければならない——このことは、われわれが見るところでは、なんでもかまわない（anything goes）という形式でなければ、多元主義の形式で行なわれる。

純粋な概念史的分析は、個別のケースについては教訓的であるかも知れないが、それだけ独立に考えると、この問題状況の本質的な解決には至らない。このことは、概念史的分析がスキナーによって社会的・政治的状况に関係づけられる場合にもあてはまる。この状況が革新的な概念装置によって克服されるところでもある。⁴そしてオットー・ブルナー、ヨアヒム・リッター、ラインハルト・コーゼレックによって社会史の変動からくる概念使用の変化、あるいは概念の新たな創出が解釈される場合においてさえも、上のことはあてはまる。⁵社会学者の好みのために、あまりに点描主義的な（スキナーの場合）あるいはあまりに包括的な（ブルナー、リッター、コーゼレックの場合）社会観がその基礎にある。

“近代(modernus)”の概念史に関して、非常にはっきりと古代および

中世の修辞上の用法を認めることができる。ここでは古代/近代という区別は、賞讃と非難の配分にのみ役立つのであり、その際その振り分けは著者とその修辞上の目標によっている。こうしたことは印刷によって、そして社会的変化をより明白に認知することによって、遅くとも17世紀には異ったものになったということ、そして区別はそれ以来社会に、あるいは社会の重要な領域に、とりわけ学問や芸術に適用されたことは周知のとおりである。しかしこの洞察はむしろ“近代”とよばれている社会が、時間図式によって、社会の自己記述の問題の解決を試みている、ということを示しているにすぎないのではないか。近代社会はそれ自身まだ十分に概念把握されてないのであって、それ故に、古いものという刻印を押すことで、自分の新しさを際立たせ、それによって、本当に生起していることを知らないという困惑を、同時に蔽い隠すのである。

近代社会が自らを“近代”と称する時、近代社会はそれ故、過去と相異なる関連体という助けをかりて、自分自身を確認する。近代社会は時間次元において自己を確認する。まずこのことはなんら特別なことではないのである。すべてのオートポエシスのシステムは、例えば個人的意識のシステムを含めて、常にその固有の過去をよびもどすことによってのみ、固有の同一性を構築することができるのである。すなわち自己準拠と他者準拠を区別することができる。⁶ この過去をよびもどすことは、今日ではしかし、同一化によってではなく、非同一化、差異によってひき起される。問われるのは、次のようなことを欲するかどうかである。われわれは過去にあったものではもはやなく、われわれが今あるものでは、もはや未来はないであろうということである。このことは、従って、近代性のメルクマールをすべてだいなしにする。なぜならば今日の近代性の特徴は昨日のそれではなく、したがってまた明日のそれでもなく、こうしたところにまさにその近代性はある⁷ということがあてはまるからである。近代社会の諸問題は、起源保存の問題として規定されるのではない——教育やその他の場所

の問題ではない。むしろ問題となるのは、異った存在を恒常的に産出することである。従って、非同一性によって、まだ規定されていないこの異った存在に対する判断基準が必要となる。そこで非同一者に対するより高次の段階の同一性が必要となる。かくしてわれわれは相も変わらず、人間性や理性を引き合いに出す——しかしそれは、伝統の自然的理解、人間と猿や蛇の違いによるのではなく、異種物の評価をわれわれに可能にするような価値概念の中和された意味においてである。

このような考え方を使用することで、近代社会について判断を下し、近代社会を、複合性に適合した仕方で記述することに、それらがいかに適していないかを容易に読みとることができる。古いヨーロッパの意味論の装置はなるほどもはや自己了解的教養財としてはマスターされないけれども、それらと決定的に別れをつけることには抵抗する。伝統に対する時間的距離は明白であり——そして受け入れ難いものである。どの点で近代社会は構造上および意味論上、近代に先行するものと異っているかを示すことができなければならないだろう。しかし、そのためには、どのような意味で、この歴史的な差異が、諸システムを区別するかということを、示すことのできる社会理論が必要となる。この諸システムは、一定の観点においては、同じ種類のものであり、あるいはむしろ同一のシステムである——まさに社会システムである。

社会学は、社会学的著述家を除けば、近代の判断基準に対する議論に参加することはなかった。このことは文学および造形芸術と対照的である。ここでは近代は個性の解放として理解され、可能なかぎりの信頼性を基礎とした探究として、(あるいはそれについての絶望として)理解される。その時、この近代の推進力はここでは非常に深く把えられているので、芸術作品と芸術理論の協同作用は現在の典型的様式においては、まったく不可分なものと考えられている。⁸

ここで希望と困難、前衛主義と伝統の残物が体験されたり、表現された

りする強さにくらべれば、そしてまた、近代社会がこの領域において自らを記述するために求めた方法にくらべても、社会学の貢献は少なかった。社会学が産み出す標語——概念については言わずもがな——は一面性を誇張するといった特質をすべてそなえている。“リスク社会”あるいは“情報社会”を考えてみるが良い。分化と複雑性のような古くからの主題を度外視すれば、近代社会——明らかに長期にわたり、一時的にではなく——をより古い社会構成に対して特徴づける、構造上のメルクマールという考え方がないのである。

まさに社会学は、豊富な知識社会学的専門領域の伝統にたいして、社会構造と意味論の連関分析を放棄することはできない。社会構造的発展の地平における連続性（貨幣経済、国家的に組織された政策、知の変革を目指す研究、マスメディア、専ら実定的な法、学年制による全住民の教育など——すべての特殊近代的な現象）は見極めがたいものである。その中にあるチャンスを利用することだけが、そしてその結果生じる問題を識別することが強化される。こうした諸現象、および、その中にある野心や危険を記述することによってのみ非連続性は起りうる。したがって、連続的な社会構造上の進化においては、非連続性が、意味論の同様に驚くべき非連続性が「起りうる。」しかし欠けているのは、このような事態に対する十分な理論であり、構造と意味論の連関についての意味論であり、構造を介して自らを再生産する社会の自己記述の論理である。⁹ 恐らく最も興味深い提案はごく最近公刊されたアンソニー・ギデンスのものである¹⁰（1990年社会学大会の時に）。ギデンスは近代の特質を“時間 — 空間 — 距離化（distanciation）”にみている。空間と時間の相互の結合が取りのぞかれるし、コンティンгентなものとなり、従って協定にもとづくものとなろう。そして「これらのことは」“行為の再帰的モニタリング”を介して、従って、他者の行為や行為可能性において、行為を決定する回帰的ネット化によってなされるのであり、これらの行為の諸条件や結果は、行為の全

体領域に対する変化が“グローバル化しつつ”引き起したとされる。地域的与件が生活方式を規定することはますます少なくなる。この諸帰結が構造と意味論をとらえるであろう。どのような要因が、空間と時間のこの関係を解消したかは、そのままにしておかれる。¹¹ただ近似的にも適切な社会理論がないのであって、この社会理論は、昨日に対する明日といった意味での近代的とされてはならないのである。

このような欠陥はとりわけ方法論上の理由がある。というのは社会学は全く、圧倒的に経験科学として理解されており、従って“経験的なもの”という概念を、データの独特の強調と評価として非常に狭く解しており、自己創出的現実の解釈ととっているからである。明白な事態を、さまざまな理論構想によって、相異なる区別によって、別様に記述するという可能性は、そうした場合、社会学の視野には入ってこない。理論技術上の知の非常に多くが前提とされるような、この方法こそまさにわれわれの主題にとっては、実り豊かなものであろう。

私は理論変異というこの方法を、もう一度具体例に即して調べることを提案する。

Ⅱ .

社会学によって育くまれた近代社会の記述の中で、マルクスとの関連でなされた資本主義的経済システムの批判は重要な位置を占めていた。それは無数のアナクロニズに直面して驚ろかされるし、また神降ろしの術が働いているようでもある。そして確かに唯物論という筋肉質の形而上学を生き返らせることはほとんど考えられないだろう。またマルクスの概念をヒューマニズムによって裏附けることは——経験的準拠の内部における社会政策上の指導理念としてではないとしても——今日では問題の多いものと思われるにちがいない。例えば“疎外”である。人間学的にではなく、

社会学的に評価すれば、ここで問題になるのは経営上と政治経済上の金融技術であり、原料コスト、信用コスト、労働コストを勘定記入する可能性であり、このような基礎の上で、どの企業が経済的に利益をうむことができるかできないかを、経営上ならびに国民的な会計制度の中で見つけ出す可能性なのである。

明らかに、そこにおいては、物質と人間が全く異った意味で“働いている”ことは度外視される。明らかにまた、労働が労働する者自身にとってどんな意味があるか、考えられていない。結局一般に、労働が金銭でもって報われ、あるいは経済的に重要な別の給付をもって報われる場合に、経済上の計算が全く違った仕方で行なわれえないことは明らかである。一般に労働する者が経済を犠牲にして生活する場合も〔同様である。〕

機能上必要な“…を度外視すること”もそうである！ フッセルの“ガリレイ的な”学問様式批判も同じ意味で理解されるべきであろう。¹² またここで重要なことは、個別的主観に対して具体的な意味付与をする意識活動が無視することである。ここではまた、技術と人間の個性に関する、視点の不一致が問題である。

技術に関する、より抽象的な概念を基礎とする場合にのみ、マルクスとフッセルの平行性がでてくる。もちろん力学的あるいは電氣的作業方式をもった機械が問題ではない。意図された効果を純粹に引き出すことが問題でもない。このような因果的技術的な観方は、かつてスターンベルクによってひき起こされた目的化論争のように、目的の批判や別の目的の代替要求によって動きのとれないものとなるだろう。全くこのような意味で、政治的力のある社会批判が問題となるのではない。技術は包括的意味で把握られると、機能しつつある単純化であり、構成され、実現される複雑性を還元する形式である。たとえ人びとが世界と社会を知らないにしても、世界や社会の中で以上のことは行なわれており、自己自身で十分に吟味している。諸個人の解放——注意すべきは、また非理性的個人の解放も——

はこの技術化の避けがたい副次的結果である。

非常に広義に考えられた技術概念のみが、近代社会の自己記述のためになるという要求を実現することができる。この技術概念がさまざまな観点や諸事情といった問題を取り除くことがはっきりする。この技術概念は個人心理上の影響や、エコロジー的影響を同じように度外視する特徴がある。この概念は科学の技術的側面を明らかにする。しかも科学的知識の生産過程への適用とは無関係にそのことを明らかにする。¹³ この技術概念は、近代社会がヒューマニスティックな自己批判やエコロジー的自己批判への傾向があることを明らかにする。しかしまた次のことも、すなわち、近代社会は例えば人間性喪失や環境問題を財政問題と理解することによって、再び、これらのことに対する反作用として技術を投入することができるということも明らかになる。

それにともなって、個性に対する社会的命令もまた変化する。問題となるのは、“何んであらねばならぬか”ではなく“いかにあらねばならぬか”である。個人は技術によって、このように限界づけられているとすると、個人は自分の観察を観察することができる距離を獲得する。個人はもはや自分自身をすら知らない。個人はもはや自分自身をすら、名前や身体や社会的配置で特徴づけるのではない。こうしたすべてのことの中で個人は不確かなものとなる。その代りに、個人は第二の秩序の観察の可能性を得る。近代的意味での個人は、彼自身の観察を観察できる人ということである。そして自分からそのことに考えがおよばないか、あるいは自分の担当医によってそのことに気づかされる人は、小説を読みそして自分自身の上に投影する可能性をもっている——*uno, nessuno e centomila*¹⁴ [ピランデロ（1867～1936）ノーベル賞文学者の作品の題目]として。

この診断を、ペシミスティックなものとしてあまりに急激に取り除くべきではないであろう。この診断はいずれにせよ、たえず更新される組合せや、さらには区別を徹底的に吟味する可能性に対する指摘として理解しう

るのであり、機能しつつある単純化のための不可欠な前提をなしている。

Ⅲ.

技術と個性というタンデム車に乗って、未来の霧の中にわれわれが入っていくことを強調するのが、近代についての唯一の記述でありつづける必要はない。このような単純化を、いずれにせよ、われわれは避けることができる。十分に首尾一貫した理論設計にのみ注目するかぎり、われわれはより詳しい特徴を探し出すことができる——そしてまた、このために非マルクス主義的に理解された、マルクスを出発点と定めることもできよう。

同時代に対するマルクスの政治経済学批判について、依然として注目に値することは、以前には、自然との連関で正当化されていた知識が、社会的文脈の中へと移行することである。資本主義の経済秩序は、マルクスによれば、個人的合理性や集団的合理性に組み込まれる傾向をもつ経済的行為の本性に従うものではない。それはむしろ社会的構造である。自然に準拠することは“物象化”（Reifikation）として述べられ、従って社会的構造のモメントとして分析される。経済理論について、特別な社会的客観性を代表するという権利主張は異論にさらされる。経済理論は社会的構造物の論理学のみを反映する。

すべて他のことは捨てても、以上のことは維持されるべきであり、そしてマルクスを超えて行かなければならない。今世紀後半の経験的認知科学において、このテーゼは、特殊経済的な、あるいはまた利害に制約された“イデオロギー的”現象であることを止揚するに至るほど一般的に主張される。それぞれの認知は構成であり——しかも認知としてのそれである。経済理論が、社会的階級としてとらえられた資本家の“利害”に役立っているということは疑われるかも知れない。そして、経済理論の偽似客観性は、国家および法によって媒介された、真の権力関係をベールで覆うこと

に役立っているという、最近の人のびとによって好まれるヴァージョンについても同様である。このレベルにおいて、議論は、基本概念と未来に対する視点をこのように不明瞭なままにしておく場合には、それがどのような利害に役立つかという問題によって押しもどされる。このような論争を継続しようとしたり中止したりしようとするかも知れない。しかし次のような基本的洞察は放棄すべきではないのではないか。つまり資本主義的経済は、特別な社会的客観性によるのではなく、それ自身によっているという洞察、利害や欲求、事物の必然的連関、あるいは合理性の長所に準拠することはすべて、^{●●●}外部の事態に基づく^{●●●}内部的準拠であるという洞察、従って、貨幣経済の論理に依存しているし、依存しつづけるであろうといったこれらの基本的洞察は放棄すべきではないのではないか。

このことは、明らかに、それだけにますます次のようなことにあてはまる。すなわちコースによって提起された取引費用およびその最少化についての最近の議論や、有利性計算の条件として、費用を外部化することの問題性や、リスク計算の文脈、¹⁵そして多くの類似の観点で便宜性費用（Opportunitäts kosten）に関して精密化しえない概念を適用することなどについて妥当するのである。これと同じ洞察が別の機能システムとの関連で定式化されるのを見出す。こうしたことはステーブ・フラー¹⁶における科学システムについても読みとれる。“固定化した準拠は、契約や約束の場合のように、^{●●●●●}社会的事実である”。

今日たとえ資本主義経済が本性によってではなく、成果によって正当化されるということで満足するとしても、マルクスの分析が結局もっているもの、通常の平均的な経済理論と区別されるものは、依然として保存されている。すなわち、経済は、その自己記述を自分から設計するのであり、経済学の理論自身の中で自らを表現し、そこから、内的準拠および外的準拠を規制しているという洞察がこれである。社会主義的な計画経済の失敗は、そこから逃れる例外はないということのみを教えてくれる。プロレタ

リア革命，それをマルクスはヘーゲルの精神に対する，物質的に基礎づけられた平行運動であるかのように，法則的にせよ，弁証法的にせよ，そのようなものなしでにせよ，意識を高めるエリートの活動によるにせよ，到来すると考えたのであるが，そのプロレタリア革命は高価な巨大実験様式の中で，より人間的な関係に立ち戻る道は存在しないことを示した。経済的なものは，経済の中においてのみ明らかになる。政治学がそのことを調べようとすれば，政治学は経済にまかせなければならない。何故なら，そうでなければ政治学は鏡の中にあるように，ただ自分の独自の経済上のプランが実現されているか否かだけを経験するのであって，そこで政治学はせいぜい原因や責任を調べることができるだけであるから。

Ⅳ.

マルクスの社会理論に対する最も重要な異論として，この理論が経済を過大に評価している——そしてそのため，今日明らかなように過少評価しているということがあげられる。グラムシやアルチュセールといったタイプの中和化もこのことに関してはなにも変えはしない。全体社会が主に経済から把えられるということによって，別の機能領域や社会的進化のエコロジー的制約に対するその影響によって，経済の固有のダイナミズムに対する，十分な理解が欠けている。とりわけ，他の機能領域における平行現象に対する，十分な理解が欠けている。そのことによって，システム比較のための基礎，および，すべての機能システムにおいても——多かれ少なかれ——みられる近代性についてのより抽象的な特徴を抽出するための基礎が欠けている。私はこのことを，構造的条件と意味論上の帰結が集中する，深部にある問題を手がかりに解明しようと思う。

近代社会を社会学的伝統にそうように，機能的に分化したシステムとして構造的に記述する場合に，そこから次のことがでてくる。つまり分化を

とげて自動的となった機能システムが、自分自身をそれらの（内部社会的なそして外部社会的な）環境から区別するというのである。操作的に、このような差異は自分の操作の単なる継続によって産み出される。システム——別の様式のどのシステムも——自己準拠と他者準拠の区別を自由に処理することができる場合に、この操作はシステムにおいて、ただコントロールされたり、加えられたり、観察されたりすることになる。このことはたんにシステム固有の区別の形式においてのみ可能なのである。なぜなら、ほかでは、“自己”と“他者”という特徴づけは、その意味を失うのであるから。この区別はシステムが自分自身と環境を取り違えることをいっつもはばむのである。区別はまた、システムが自分の地図を領域ととり違えることや、あるいは、ボルヘスが検討したように、自分の地図と領域を一対一対応が可能なほど複雑に設計しようとすることをはばむのである。しかしこのことが区別によってはばまれると、一体、自己準拠と他者準拠に関するこの区別の統一はどのように考えられるべきなのか？ それは統一として観察可能なものとして存在するのではなく、統一として操作的に用いられる。システムは自己準拠と他者準拠の間を振動するのであり、その場合、区別のそれぞれ別の側面への道は開けておかれる。しかし区別の統一は、その際、それらの組み合わせの可能性の想像上の空間の統一として前提されたものとしてあるのである。¹⁸ この統一はそれ自体として特徴づけられない。それは、それによってある物を観察したり特徴づけたりすることができるための条件として“盲目的”に利用される。¹⁹ 別のことばで言えば、自己準拠と他者準拠の根底的な分離と無関係に解決しうるような準拠の問題はない。あるいは再度別様に定式化すれば、あらかじめ与えられた世界に対する、共通の（正しく、客観的に対応する）構えは存在しない。

たとえ操作的レベルで、内的なものと外的なものを区別することが不可避であるとしても、理論（理論についてもこの区別は同様に不可避である）は、それにもかかわらず二つの場合において、準拠も観察もともに問

題であることを示すことができる。このことを述べようとするなら、第二の秩序の観察のレベルで操作しなければならない。(そこで私は操作!を強調する。) このことは第二次サイバネテックスにおいて、論ぜられるような特殊な論理的予防措置を必要とする。²⁰ 自己準拠と他者準拠という区別の統一は、したがって第二秩序の観察可能性の条件の特質の中に含まれている。

そこから人びとはしたがって、次のような組み合わせ上の利益に気づく。それは、観察されるシステムの操作が二つの相異なる情報源、内的および外的なそれを絶えず示すことからでてくるものである。²¹ それ故により高次の刺激誘発性が内的にプロセス化されうるのである。経済システムという結合する操作としての支払および現物給付を考えよ——それはわれわれが立ちもどる一例ではある。

これらのことすべてにおいて、区別という二つの側面-形式の統一を、それを使用するに際し、ともに主題化することは依然として不可能なのである。統一は区別によって排除される第三のものである。それにもかかわらず区別を区別することができる。究極の統一体を手に入れるという不可能なことの代りに——社会にせよ、世界にせよ——近代社会の機能システムの中に準拠性とコード化という区別がでてくる——準拠性は自己準拠と他者準拠の区別という意味においてであり、コード化は肯定的コード価と否定的コード価の意味におけるものである。二つの区別はたがいに論理的に無関係である。この区別は、互いに“直交”(orthogonal)しているとも言える。つまり、準拠性区別の二つの側面は、二つのコード価を受け入れるのである。コード価は普遍的で、そして同時に特殊な二項的シェーマとして役立つ。この図式は機能システムを同一化するために役立つのであり、自己準拠的であると同時に他者準拠的であり、システムに対してと同時に環境に対しても適用可能である。またこのケースにおいては、コードの統一は、操作能力のないイマジネーションでありつづける。コードを自

分自身に適用することはパラドックスに陥る。世界は、どのコードから出発しようと、パラドックス的にのみ自己確認される。つまり、論理的に無限な情報負荷としてののみ自己確認される。²²そしてまた区別を区別すること、従ってコード化と準拠を区別することは、それにもかかわらず可能であるということは認められている。このような可能性、およびこの可能性によって開かれた組み合わせの作用空間で、近代社会は満足しなければならない。近代社会はもはや契約思想や、準拠能力のある統一や、近代社会の形式と規模を定めるメタ物語（リオタール）に関係づけられない。かくして厳密に、この意味において、近代に関する古典的意味論は失敗したのである。

以上のことは、さしあたってただ大胆な、そして社会学にとっては不慣れた抽象的状况における、直接的には理解できないような主張である。これらの主張の正当性をどのようにして確認しうるか。これらの主張がわれわれに、現代の社会システムの近代性に関する、適当な記述をあたえてくれることをどのようにして基礎づけうるか。

私はすでに、これらの主張は機能的分化のシステム論理学に対応していることを示した。そのかぎりでは、問題になるのは、機能的に特殊な部分システムのオートノミーという概念を、完全に定式化することである。それはこのような諸システムにおいて用いられるすべての区別の基礎になっている。それ故に、これを立証する責任は、実は次のような論争的問題へと押しやられるにすぎない。機能的分化は実際に自動的で操作的な閉じた部分システムの機構として、古い様式における、分業の制限された意味での豊かな長所に代るものとして、理解されるかどうかという問題へと押しやられる。この問題にさらに進むかわりに、私は現実の理論上の論争のために、準拠とコード化というこの区別の重要性を調べることを提案したい。この理論上の論争は、アカデミックな原理の図式および、準拠とコード化が関係づけられる機能システムに関する区別を基礎として、たがいに同時

的に出現する。以上のような処理方式によってますます有望な脈絡は発見される。

まず認識一般と特殊な科学システムに関していえば、今日、準拠の問題が論議の中心点をなしている。しかし“記号論”についてさえ、記号と指示されたものの間に、確固とした、時間的に相互主観的に恒常的ないかなる関係も、もはや前提してはいないという意味で語られる。²³傾向として、それ故に論議の出発点は、対応理論から構成主義的理論へと移動する。論理実証主義にとって有効であった（他者＝）準拠、感覚と真理に関する定義連関体はクワインの強力な批判によってゆさぶられる。²⁴これによって、感覚と存在を万人に対して一致させるための（さしあたっての）最近の試みは難破したとされる。しかし結果として、まず“實在論的”理論と“構成主義的”理論に関する、理論的に無意味な論争だけが取り入れられた。誤って提起された問題に対する通常の中途半端な解答は、構成主義も實在論を軽く混合しなければ、うまくはこばないというようなものである。この論争は次のようなことですでに失敗に終わったのである。すなわち、いかなる構成主義者も——エジンバラの強力なプログラムの代表者も、ピアジェもグレザーフェルトも、生物学的なあるいは非生物学的な起源をもつ進化論的認識論もハインツ・フォン・フェルスターの第二次サイバネテックスもどちらもともに——それぞれに、構成は環境に適応した現実の操作によって作り上げられなければならないことを否定しないだろうという理由によって失敗する。科学システムにおいては、この操作には、とりわけ公表が必要である。事実またすでに、このような公表制の確立をより厳密に研究し、それをむしろ参照（“making reference”）として特徴づけている。²⁵

準拠問題とコード問題の区別がなされるやいなや、諸関係が新たに整えられる。分析的真理と総合的真理の区別は、すでにクワインの提案の²⁶ように中止されなければならない。この区別は直ちに自己準拠（＝分析的）と

他者準拠（＝総合的）という区分によって置き換えられる。そこで準拠とコード化という区別が影響力をもってくる。そしてコード（真/偽）の肯定的/否定的価値は他者準拠的に、また同様に自己準拠的に扱えられた事態に適用可能であることが明らかになる。単に分析的にのみ有意味な真理は道具的方向づけの結果ではなく、現実の、すなわち経験的研究の投入以前の一種の吟味行為、モデル形成などといったものでもない。むしろ、これらのものはその中で、システムの自己回帰が自分のパラドキシカルな基礎を知り、それを自己準拠/他者準拠の意味で、システムと環境の非対称性の助けをかりて、解決することができるような領域である。自己準拠の文脈の中で反省されることになるのは、自己準拠と他者準拠の区別もまたなおシステム固有の区別であり、この区別はシステムの高度な分化と操作的閉鎖性の結果として明らかであるということである。論理的にみれば、これはゲーデル以来周知のこととなった、無矛盾性を自分で証明することの不可能性という問題へと通じている。システム理論的にみれば、これは、自己組織化は環境なしには不可能であるというアシュビの証明²⁷に通じる。数学において、これはあらゆる数学的形式を自己準拠と区別の根源的統一（従って観察の可能性の条件）に関係づけることを考慮するように促すのである。²⁸しかしまた以上のような論証をしなくても、あらかじめすでに明らかになっていたことといえば自己準拠は、それらを区別することができる他者がある場合、まさしく他者準拠がある場合にのみ、形式として可能になるということである。

この考察は、結局、真理の二元的コードを前構成主義的な安全性の中で自分を安定させることから解き放すのであり、このことが自然や人間の本性（理念）についての仮定であれ、それらの言語学的な合理主義的な合意主義の継承理論であれ、²⁹そうなるであろう。真理はその場合、肯定的価値にはほかならないのであり、その否定的価値（反省的価値）が非真であるような、あるコードの名称上の価値（Designationswert）にはほかならない。

その時、科学的認識の特性は、知を媒介しているという権利要求をかかげるあらゆる観察が、この二元的コードの助けをかりて第二の観察に従うということ、うまく進行しているシステムの中に、結果が集積されているということによる。（次のようにもいえる：相互的制限に従属していると。）それ故、真でありまたは非真でありうるものすべては、観察を観察するというレベルへ移され、このレベルで再定式化される。より広い安全確保は断念される——このことは経済が貨幣の価値を、もはやどんな外的準拠によっても保全しうるものではなく、ただ中央銀行による（それ自身で、貨幣価格に影響を及ぼす通貨政策上の）貨幣数量規制によってのみ保全しうることを学んだのと同列である。

さて今や別の機能システムに注目すれば、全く類似の問題状況に気づく。法システムにおいて、概念法学と利益法学の対立が19世紀末以来問題となっているのであるが、それはあたかも法理論がそれぞれ相異なる解釈の間の選択であるかのようである。その間にこのイメージはさまざまに修正される。歴史的転換の対照化と理論は、批判的概念法学者を正当化しないことがわかる。³⁰ 法学的実践において、法の特殊な概念性は抽象作用、ケースの比較可能性、規則および法学的に重要な区別といったことがらを獲得するためには必要不可欠であることが判明する。同様に今日明らかになっているのは、自己自身の上に立てられる利益法学は、決してあらゆる利害を等しく守るのではなく、保護に価いする利益だけを守ることである。一面的に利害に定位する理論に対しては、法的保護に価いする利害のみが法の保護を享受することができるというトートロジーが残るばかりである。³¹ それに対応して、利害衡量の日常的定式は、法学的判断能力のあるプログラムがないままの状態にとどまる。

われわれが自己準拠と他者準拠の区別という法システムの的に特殊な捉え方に直面していることをみるのは、今やわれわれにとっては容易なことである。³² 概念に定位することが自己準拠をあらわし、法概念や法学的構成そ

して、利害にもとづく状況決定などの効果に定位すること、がシステムの他者準拠をあらわす。分析的真理理解と総合的真理理解の区別におけると同じく、このような分離においても、一方の側と他方の側の間で選択することができるかのようなことは成立しない。そうではなくてむしろ、常に両側面が作用しているのであり、それに対応して法/不法コードは外的準拠の文脈と同じく自己準拠の文脈でも適用可能なのである。

われわれがすでにみたように、法に適した利害、法に適さない利害がある。システムの自己準拠という文脈においてこの関係は一層複雑となる。法に適った概念、法に反する概念について語ることは普通ではないといえよう。その理由は、法概念が法および不法に関して、法に適う決定を根拠づけるために寄与しなければならないからである。法概念は自分自身に対して、法コードを適用するという究極的なパラドックスを操作しうるものである。何故ならシステムは、自分が法および不法について決定を下しうるということを法（そして不法でないもの）とするのであるから。このパラドックスを見えないものにし、実定法を形成するというこの必然性のために、まさしく法概念の法身分は不明瞭なままとなる。³³ 疑いもなく、法概念が不可欠の道具であるのは、決定の一貫性と従って区別の法適合性を法と不法の間で組織化することが問題となる場合である。法概念の機能はさまざまな事情のもとで、法と不法の区別の整合性ある取扱いを確保することにあるだろう。

準拠とコード化の間を、首尾一貫して、区別するとすれば、それはまた法システムと法理論に広範な効果をもたらすことになるだろう。科学理論におけると同様に、ここでもまた、根本的パラドックスを展開する自己準拠的秩序の複雑な構造物は、より良くあてはまることになるだろう。そして、この点からシステムが、どのような内的優先権と自己産出的制限を基礎として、外部と接触することで、法に適合する利害と法に反する利害を区別することができる状態になるかを、より良く理解されるようになるだろう。

究極の事例は経済システムからとられるべきだろう。ここでは取引（Transaktion）の概念が最近の論議を支配している。³⁴取引において、究極³⁵のもはや解体不可能な経済システムの統一体をみることが当然とされる。しかし取引概念はそれ自身複雑な概念であり、より詳しく見ることで、それが準拠とコード化の分離を前提していることが明らかになる。

準拠は、つねに自己準拠と他者準拠に区別されている。自己準拠は貨幣の支払によって再生産される。支払過程はシステムの支払の能力と支払の不能力を転送する。それは次の瞬間に再び支払能力と資金需要が与えられることを保証する——それぞれ別の側においてであるにしても。支払は、その限りで、システムのオートポイエシスを遂行しており、同一システムのさらなる操作の無限の可能性を実現する。³⁶貨幣媒体およびその中にうめ込まれた諸形式（価格）によって、システムは自分自身を参照するよう指示する。取引の別の側面は現物給付とか労役給付を運動させる。ここで問題となるのは諸欲求の満足である。従って他者準拠が問題である。何故なら欲求は経済システムの外部につなぎとめられていなければならない。たとえ経済そのものが継続して固有の欲求を、例えば産業構造に対する投資欲といったものを産出するにしてもである。常に取引は、その二つの側面において、完全に経済内的過程であり、半分は内部で半分は外部で行なわれるようなものではない。しかしこの取引は（自己準拠的に閉じたシステムにおけるすべての操作のように）、それが環境世界を構成しないで、環境世界を参照するよう指示する場合には不可能となるであろう。他の場合におけると同様に、システム内部的に、確かに、適切であるか否かが示されるような構造が、そこでは問題である。欲求の評価が適切か否かということは、企業レベルや、また国家レベル、国際的レベルにおける経済内の会計制度において明らかになる。しかし、この制度は固有の結果をとおして、固有の評価をコントロールすることで、成り立っている。システムは、欲求が“現実的である”ことを決して知ることはない。

内的準拠と外的準拠のこの連結は、システムが二元的コードを自由に利用しうるが故にのみ機能する。このことは現代ではしばしば所有権（property rights）という観点のもとで論ぜられる。より単純に言えば、問題になるのは、ある人が何物かを所有（即ち貨幣または商品を）し、他のものを所有していない（即ち商品または貨幣を）場合にのみ、取引に参加しうるということである。この所有/非所有というコードは準拠の区別に対して直交している。容易にわかるように、システムが所有そのものや非所有を環境世界に関係づけるような場合には、システムは機能化しえないであろう。システムの秩序化作用は、これまで論じられたケースと同じく、二つの区別の差異の上に成立している。ただこれによってのみ、組み合わせの作用空間は獲得され、システムはこの空間の中へと進化し、複雑な秩序を作り上げたり、とりこわしたりすることができるのである。そして他の場合においてもまた、それ故、合理性、進歩に対するいかなる保証も与えないのであり、あるいは社会福祉の水準以下の現実の全体的成果に対してすらも、いかなる保証も与えないのである。

この分析は、近代社会において合理性ということ考えられるものに対して重要な影響を及ぼす。伝統にかかわる合理性概念は、外部的な意味優先によって生きてきた——それが自然法則のコピーを目指したものであれ、あらかじめ与えられた目的を目指したものであれ、目的選択のためにあらかじめ与えられた価値評価の基礎をめざしたものであれそうなのである。宗教的世界定立の世俗化にともなう、唯一正当な出発点を代表するということがなくなるにともなう、以上のような、意味の優先性はその基礎づけの力を喪失する。合理性についての判断はそれゆえ、外部的な意味優先から切り離され、常にシステム内でのみ調整可能な自己準拠と他者準拠の統一へと置き換えられねばならない。おそくとも、ここでは“ポストモダン”という不幸な偽りの名のもとに、目下行なわれている分析との関係が明らかになる。再三聞かされる誤った判断、それは議論のある種の

戯れによってはぐくまれるのであるが、それは次のように言う。「このことは結局任意性に帰着する」と。個別の機能システムからの例は、けれどもこの判断を否定するに足るものを示すことができる。³⁷そしてまさしく社会学的分析にとっては、現実の中に、任意性はまったく存在しないことを示すのは容易であろう。

先にのべた分析が非常に多様な機能システムを扱っていることに注目しなければならない。そのシステムの自動性は操作上の完結性と特殊な差異性を尊重しており、それにもかかわらず根底にある構造の中で一致点を発見するのである。あらゆる差異にもかかわらず、機能システムは比較可能なものである。このことは、すなわち、社会システムの分化する形式によって、その独自の形態を得る社会システムのサブシステムを問題とすることによって明らかにされる。われわれは、そこから、近代社会に一貫してみられる特性を推論することができる——たとえば、この特性が機能システムに即してのみ明らかにされるとしても、そしてまさにこうした理由によっても、その特性を推論することができる。

V.

この分析の結果を包括的に視野に入れると、モダンとポストモダンという対比の基礎はとり去られる。構造上のレベルでこのような「モダンとポストモダンの」切れ目が話題になることはどのみちありえない。近代社会をそのすべての先行する社会からきわだたせる、まさにかの進化論的成果、つまり完全に発展したコミュニケーションメディアおよび機能的分化は、ささやかな始点から、近代社会を不可逆なものとする巨大な秩序へと成長しているということが、たかだか言えるだけである。近代社会は、今日、ほとんど抜け道がない仕方で、自分自身を頼りとしている。

ここから意味論のレベルで、補充のための需要が生じる。ポストモダン

ということで、統一的世界記述が欠けていることや、万人に対して拘束力のある理性の欠如、あるいはまた世界や社会に対する共通で適正な構えの欠如といったことを理解する場合には、こうしたことは、まさに、近代社会が自分自身をゆだねている構造的諸条件の結果である。ポストモダンはいかなる決定的思想ももっていないし、それ故、いかなる権威ももっていない。ポストモダンは、社会が社会の中で他のものに対して、そこから、拘束力のある仕方で記述されるようになるところの位置を知らないのである。問題となるのは、理性へと解放されることではなく、理性からの解放である。そしてこの解放は努めて手に入れられねばならぬものではなく、すでに生起している。常に自らを理性的と思い、またそう言っている者が観察され脱構築される。しかしまたこのようなことを、定式化する社会学に対しても類似のことが起る。観察をこのように観察する途中で、所与の条件のもとで、もはや変化しない安定的な固有状態が生じるかどうか、という問題がありうるだろう。

しかし一つのことに代って、今や単純に多くのことが出現するのか。世界の統一と社会の統一は、取り消しがきかないように、システムと論争の多様性へと解体されるのか。相対主義、歴史主義、多元主義は、自由について語るときには、いつも考えられるような究極の解答であろうか。このことは、世界社会の統一が不可避となった歴史的モメントの中で——極めて避け難いものになり、二つの相異なる経済秩序=資本主義的、社会主義的経済秩序をもはや認めることができないほどなのだろうか。

おそらくは、こうしたパラドックスが展開され、そしてそれは操作と観察を区別することによって解決されうるのである。³⁸ 社会的コミュニケーションという操作は、社会システムの統一を^{●●●●}産み出すのであるが、それは別の社会的コミュニケーションを回帰的に頼りにしたり、あるいはそれを先取りしたりして、そしてこれを通して、システムと環境の^{●●}差異を産み出すということによっているのである。この操作はそれを実行することに

よって観察に身をさらすのである。観察はその際、このコミュニケーションを他のものから、あるいはまた、それによって再生産されるシステムを環境から区別しなければならないのであり——自分の側で観察に身をさらす操作などを実行することでそうするのである。観察は区別を選択しなければならぬし、選択できるのである。そして観察は自らが選んだ区別に関連して、あるいはまた選ぶことを避けた区別に関連しても、観察されうるのである。³⁹このことが相対主義の源泉である。すべての観察は区別に依存しつづけるのであり、その際使用されている区別は観察されることはできない。（それがいかなる場所的限定もないことは、ベイトソンの言うとおりであり、⁴⁰ハインツ・フォン・フェルスターの言うように、⁴¹それは盲点として観察に役立つ。それは、一方の側とか別の側とかのどちらにも見出されないし、したがって回帰的操作に利用しうるような、どんな側面においても見出されない。）そして多数の区別が自由に利用され、同一のことを非常に異った仕方で区別することができるが故に、観察から独立してあらかじめ与えられる実在は存在しない。⁴²それ故にわれわれは準拋問題とコード化問題（特徴づけの問題と区別問題）を区別しなければならなかったのであるし——区別すべきである！

事情がどんなものであるかを確かめようとすれば、観察を操作的に行うことに依存する可能性だけが、それ故に残されている。つまり、観察者がどのような区別を利用しているか、そこにおいて（別の側面においてではなくて）より広範な操作を行うために、その区別のどの側面をきわだたせているか、⁴³に関して、観察者を観察するということである。実在として構成されるものは、結局ただ観察の観察可能性によってのみ保証されるにすぎない。このことは強力な保証である。なぜならば観察はまた操作として実行されるときに観察であるにすぎないのであるから。そこで観察は操作がなされない場合には観察ではない。第二の秩序のこのような観察の特殊な近代性は、観察がもはや共通の世界を頼りにしているのではなく、存在

論的に前もって定められているのでもなく、観察者は自分の区別によって何を見て、何を見ることができないかという問題が、第一義的ではないにしても、出てくるのである。⁴⁴ われわれは動機に疑念をもつ国に住んでいる。ロマンの国、イデオロギー批判の国、心理療法の国に住んでいる。そこでわれわれは、それ故に、すでに吟味された特殊な場合を度外視すれば、その中で近代社会が、こうした諸条件のもとで証明される諸形式によって実験している、そのような機械論の領域にいたのである。

それはいかなる形式でありうるだろうか。たとえば、社会の自己記述が観察を観察するとか、記述を記述するといった回帰的ネットワークから与えられるとしても、このような操作を働かせることで、固有の価値が生じることが期待されうるであろう。つまり観察をさらに観察することによって何も変化せず、安定的であるような位置が期待されうるであろう。⁴⁵ この固有の価値は、近代社会においては、しかし直接的観察の対象ではない。それらは諸事物の同一性とは考えられえない。この諸事物を別の観察者は、常に全く異ったものとして知ることができる。同様に、この固有の価値を究極的に（理性的に基礎づけうる）規範的な要請の中に見出すこともない。なぜなら、このような要請をおくことは、さらなる観察者という批判的問題を常に認めることになろう。誰がそれを言っているか。それは誰の利害に役立つか。誰がそれを必要としているかなどである。19世紀には、古い自然概念は、存在と価値（Geltung）の区別によって破壊された。しかしこの区別はわれわれの場合には全く役に立たない。というのは、われわれは二つの領域で、第二の秩序の観察というレベルで、あらゆる発言がコンティンгентになるという経験と対決しているのである。つまり、それぞれの観察、また第二の秩序は、どのような区別を利用し、その結果なにがみえないものになっているかという問題と対決することができるということである。このことはまず、近代社会の固有な価値はコンティンгентな様態の中で定式化されているにちがいないという推測にいたる。⁴⁶

恒常的なものとは、“ネゲエントロピー的”秩序における最小のものである。すなわち、拘束された二者択一をとまなう秩序である。その固有の価値は“位置”や“機能”にあり、これらの位置や機能は常にまた別のものであったり、まさに任意にではなく、必然的に別のものでありうる。安定性はしたがって、われわれの目の前にあるすべてのものに対して、ただ制限された代償可能性が考慮されるということによって保証される。しかしわれわれが引越すことができるのは、別の住居を見つけたときだけである。個人的に利用することが出来る自動車が利用できないことになり、許可されないことになれば、別の交通可能性によって代替されねばならない。車の代りにロッキングチェアで満足することはできない。これと同じように、われわれの社会を国家なしに、法なしに、貨幣なしに、研究なしに、マスコミなしに考えることは困難である。このような活動範囲をもった機能が自己代替的秩序を基礎づける。そしてそれだけに、社会秩序を分化した機能システムなしに、完全に思い浮かべることは困難である。つまり、機能的分化という機能に対して、オルタナティブを見出すことは困難である。

原則的にはもちろん、また、この深部状況の固有の価値は単なる一時的な拠り所と考えられている。しかしこれらの固有価値の排除は“カタストロフィー”に至るであろう——カタストロフィーは厳密なシステム理論的理解からすれば、別の形態の安定への突然の移行である。近代社会の特性として、このようなことを考えたり、伝達したりすることが出来るということがあげられる。しかしそこで問題になるのは機能的等価物ではなく、重力のない想像上の空間における“オルタナティブな社会”である。この空間においては一切の区別は止揚され、システムの統一は環境に対する区別なしに自らの中で自足している。

われわれが慣れ親しんでいるタイプの近代社会は、その固有のダイナミズムをこの社会の固有価値の形態に負っている。近代社会が自己同一性と

して確立しているものはすべて、制限された交換可能性や代替可能性を提供することに、そして機会を期待することに役立っている。これに必要なのはまた、社会の世界記述や自己記述において、それらのものを自己同一化ができるかぎり、基礎を取り替えることができることである——例えば、実体概念を機能概念によって置き換えること⁴⁷、あるいは、基準となるアプリアリという考え方を、システムの一時的自己拘束という歴史過程によって置き換えることである。避けがたい結果は、ロマン派がすでに示しているように、世界という舞台装置に、もはや信頼は寄せられないということである。ロマン派は悪魔的な仕方で、どんなに合理的な出来事にも介入し影響をおよぼす。⁴⁸ 詩文の準拠システムは自分自身に、あらゆる他者準拠に先立って優先性をあたえる。——しかしそれもただ、他者準拠を多義的なものとして現象させるためにである。そしてこれはまた別の問題、時間問題に対する解決でもあった。なぜなら、未来について、それは過去とは異なるものであろうということが、今ではもうただ知られるにすぎない。このことによってどの帰納推理も未決定となり、すべての形式が時間指標を備えることになり、現在是一个の限界価値となる。これは過去と未来の差異を統一しているものとして、そしてまさにそれ故に時間の中で、排除された第三者として機能し、もはや局所化されることはない。社会学の知見がなくとも、20世紀以来、これらのことはすべて知られている。ノーヴァリスのことは：“われわれは普遍的に妥当する諸形式をもった時代からぬけ出してしまった。”⁴⁹

注 1. この仮定はG. S. ブラウンの形式計算と対応している。それは隠されたパラドックスから始める。つまり、区別と指示から成立しており、唯一のオペレーターとして操作しなければならない“区別”を立てることを指示することから始める。そして区別を区別されたものの中へ、“再参入する”という明らかなパラドックスをもって終る。次を参照のこと。

Laws of Form (1969) 新版New York 1979.

2. 周知の例としては以下を見よ。J. Habermas Die Moderne-eine

- unvollendetes Projekt. in : ders., Kleine politische Schriften I-IV, Frankfurt 1981, S.444-464.あるいはS. Toulmin, Cosmopolis : The Hidden Agenda of Modernity, New York 1990. 独訳 Frankfurt 1991.
3. 例えば “L'autre cap”, Liber 5 (1990) S.11-13. 引用はLe Monde vom 29. Sept. 1990版による。
 4. 次の議論を見よ。T. Ball / J. Farr / R. L. Hanson (Hrsg.) Political Innovation and Conceptual Change, Cambridge England 1989.
 5. 例えばこのようなプログラムとしては歴史的基礎概念事典参照。Historisches Lexikon zur Politisch-sozialen Sprache in Deutschland, Stuttgart seit 1972. さらにJ. Ritter, Metaphysik und Politik : Studien zu Aristoteles und Hegel, Frankfurt 1969.
 6. 特に意識については以下を見よ。W. Bergmann / G. Hoffmann, Selbstreferenz und Zeit : Die dynamische Stabilität des Bewußtseins, Husserl Studies 6 (1989), S.155-176(166ff.).
 7. そのかぎりでF-X. Kaufmannは次のように定式化した。「社会的諸関係が近代的であるのは、その変化の可能性と同時に、その定義によって過去がともに考えられるかぎりにおいてである。」Religion und Modernität, in : J. Berger (Hrsg.), Die Moderne——Kontinuitäten und Zäsuren, Soziale Welt, Sonderband 4, Göttingen 1986, S.283-307 (292). しかしこの定式化はまだ不十分である。それは“オートロギシュ”に転換されなければならない。従って近代の特徴そのものに関係づけられねばならない。またここでも、現代的とは昨日の明日であろうということは成り立つ。
 8. 例えば次を見よ。P. Bürger, Prosa der Moderne, Frankfurt 1988, 18世紀における近代のこの特殊様式の成立については以下を参照。S. J. Schmidt, Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur im 18. Jahrhundert, Frankfurt 1989.
 9. これについてはN. Luhmann, General Theory and American Sociology, in H. J. Gans (Hrsg.) Sociology in America, Newbury Park Cal. 1990, S.253-264.
 10. 以下を見よ。The Consequences of Modernity, Stanford Cal. 1990.
 11. ギデンスは“機能的分化”による説明を拒け、社会概念を国民国家のレベルに結びつけ、そこで“行為の反省的モニタリング”が歴史的法則性のある様式に従って、この帰結に至るということ、は言えないであろうから、広範なコミュニケーション技術の発展による説明に、もともととどまる。しかしそうすると近代への移行は、文字の発明とともに始まることになろうし、その最初の成果は紀元前2千年のエジプトおよび中近東で生じた多民族＝意識ということになろう。
 12. Edmund Husserl, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die

- transzendente Phänomenologie, Husserliana Bd. VI. 1954.
13. 科学システムにおける技術と“制限性”の関係については以下を見よ。
Arie Rip, The Development of Restrictedness in the Science, in :
Norbert Elias et al. (Hrsg.) Scientific Establishments and Hierarchies,
Sociology of the Sciences Bd. VI. Dordrecht 1982, S.219-238.
 14. 例えば、観察を扱っているピランデロの小説の題名『一人、誰でもない
か、10万人』をみよ。引用は次による。Opere di Luigi Pirandello,
Neuausgabe Milano 1986 Bd. 2.
 15. 重要な論文は次の中にある。Ronald H. Coase, The Firm, the Market
and the Law, Chicago 1988.
 16. 見よ。Aaron Wildavsky, Searching for Safety, New Brunswick 1988.
 17. Social Epistemology, Bloomington Ind. 1988, S.81.
 18. 分裂症の研究から出発する Jacques Miermont も参照せよ。Les
conditions formelles de l'état autonome, Revue internationale de
systémique 3 (1989), S.295-314.
 19. 超越論的哲学も、客観的精神ないし物質の弁証法理論も同様に、カント
もヘーゲル、マルクスも同様に、まさしくここに希望をもっていた。今日
では、理論連関を見通すことができる人は、もはやこのような希望は共有
しえないであろう。カントやヘーゲルにおいてみられる上昇し、決して再
び乗り越えられることのない理論構築の意識は、その他の点についても、
次のことを示していた。つまり、1800年頃の革命期には、いずれにせよ、
もはや素朴に存在論的に論議されえないということ、しかしまた他方で、
世界を審査する形而上学に対する期待を捨てる覚悟はなかったことを示し
ている。ギュンターによる弁証法哲学の“超クラシック”な再構築は存在
論と論理学の厳密な対応に固執しており、そして——まさにそれ故に——
時代と社会性の適切な理解のために多値論理学を要求する。Gotthard
Günther, Beiträge zur Grundlegung einer operationsfähigen Dialektik, 3
Bde. Hamburg 1976 – 1980.
 20. われわれが注目するのは、ここにおいて問題となるのは、その独自の区
別を操作的に（観察的にではない）導入した論理的タイプのヒエラルキー
ではなく、それぞれ基礎にある区別の交替による第二秩序の観察のヒエラ
ルキーであるということである。
 21. これについては Gregory Bateson, Natur und Geist : Eine notwendige
Einheit の“世界についての多面的な見方”の章を見よ。独訳1982,
Frankfurt S.86ff.
 22. 近代情報理論の分析は、厳密にこの無限性を出発点として、“創造的”
に作用するが、しかし時間的に不安定な制限、のために取り扱う。以下を
見よ。Klaus Krippendorff, Paradox and Information, in : Brenda Dervin /

- Melvin J. Voigt (Hrsg.) Progress in Communication Sciences Bd. 5, Norwood N. J. 1984 S.45-71. 非決定性による構造獲得のテーマについてはまた以下を見よ。Robert Platt, Reflexivity, Recursion and Social Life : Elements for a Postmodern Sociology, The Sociological Review 37 (1989) S.636-667. 別の可能性は、あらゆる機能システムにおいて、同一性をつくり出すコード化とコード価の正しい割り当てを、たんに一時的にのみ結合するプログラム化を区別することである。
23. 例えば次を参照せよ。Dean MacCannell / Juliet F. MacCannell, The Time of the Sign, Bloomington Ind. 1982. すべての準拠（あるいは“代表”）のこの浸食についての、より有名な叙述は Richard Rorty, Philosophy and the Mirror of Nature, Princeton 1979.
 24. とくに影響のあった論文, The Two Dogmas of Empiricism (1951) 新版 W. v. O. Quine, From a Logical Point of View, 2. Aufl. Cambridge Mass. 1961. S.20-46. フランスにおける平行現象は、あらゆる他者準拠を決定的に閉め出す、ソシュール言語学およびデリダの根底化の中にみられる。
 25. 例えば Charles Bazerman, Shaping Written Knowledge : The Genre and Activity of the Experimental Article in Science, Madison Wisc. 1988, S.187ff. この修辞学から由来する研究、審査することを審査し、したがって自分自身をテキストとしてみるという研究は、平行的に進行する社会学的探究への道を開く。
 26. A. a. O.
 27. 以下を見よ。W. Ross Ashby, Principles of the Self-Organizing System, in : Heinz von Foerster / George W. Zopf (Hrsg.), Principles of Self-Organization. New York 1962. S.255-278 : 新版 in : Walter Buckley (Hrsg.) Modern Systems Research for the Behavioral Scientist : A Sourcebook, Chicago 1968 S.108-118.
 28. 以下を見よ。Luis H. Kauffman, Self-reference and Recursive Forms, Journal of Social and Biological Structures 10 (1987), S.53-72.
 29. とくにこの発展については、Ian Hacking, Why Does Language Matter to Philosophy, Cambridge Engl. 1975. この関連の中に、合理主義的か同意主義的かいずれかの真理基準という一面性を、その組み合わせによって、合理的な受容可能という意味において和らげる試みがある。例えば以下を見よ。Hilary Putnam, Vernunft, Wahrheit und Geschichte, Frankfurt 1982 又は Jürgen Habermas. Theorie des Kommunikativen Handelns, 2 Bde. Frankfurt 1981.
 30. 例えば次を参照。Ulrich Falk, Ein Gelehrter wie Windscheid : Erkundungen auf den Feldern der sogenannten Begriffsjurisprudenz,

- Frankfurt 1989. あるいは今世紀の論争については次のポレミークを。
Eduard Picker, Richterrecht oder Rechtsdogmatik——Alternativen der Rechtsgewinnung? Juristenzeitung 43 (1988) S.1-12, 67-75.
31. 利益法学の代表者の一人 Roscoe Pound はこのトートロジーにしばしば危険なほど近づく。主著 Jurisprudence, 5 Bde. St. Paul Minn, 1959 の中で、例えば次のように言う。法律的系统は法的秩序の目的を次のことによって達成する。(1) 個人的な、公共的な、社会的な利害を認めることによって、(2) これらの利害が認められるべき範囲を定めることによって、法的規範によって効果が与えられ、司法上の（今日では行政上の）手続き、権威ある技術に従って、適用される範囲を定めることによって、(3) 定められた範囲で認められる利害を守る努力によって。(Bd. 3. S.16) 明らかに承認あるいは非承認のための、法的に重要な基準は、利害から取り出すことはできない。社会は利害を前もってすでに分離したものとしてでなく、この区別に従って産み出す。法システムは従って、たんなる利害の登録以上のことを行う。しかし、どこからこの“以上”はでてくるのか。
 32. これについてより詳しくは、Niklas Luhmann, Interesse und Interjurisprudenz im Spannungsfeld von Gesetzgebung und Rechtsprechung, Zeitschrift für Neuere Rechtsgeschichte 12 (1990) S.1-13
 33. 19世紀以来、概念的に定式化された法学が法源に位地を与えるという傾向がある。例えば、Neil MacCormick, Legal Reasoning and Legal Theory, Oxford 1978 S.61 ; Michel van de Kerchove / François Ost, Le système juridique entre ordre et désordre, Paris 1988, S.128ff. ただ法システム自身、法の操作という事実の中で、法源として考えられることが相互に理解し合えると推測されるだろう。
 34. このことはもちろん取引コストを区分する点で優れているが、内包されている概念の十分な解明はない（貨幣、欲求、一時性、コード依存性等）。
 35. 例えば、Michael Hutter, Die Produktion von Recht : Eine selbstreferentielle Theorie der Wirtschaft, angewandt auf den Fall des Arzneimittelpatentrechts, Tübingen 1989, S.131. それに対する解説として“取引は内部からみれば通知（支払い）であり、外部からみると給付移転である。”それ故に、われわれが準拠性問題として扱ったものは観察者の問題として叙述される。観察者は内部視点と外部視点の間を振動する。そしてこの観察者はまた経済システムそのものでもありうる。
 36. これについて詳細は Niklas Luhmann, Die Wirtschaft der Gesellschaft, Frankfurt 1988.
 37. Giddens, a. a. O. (1990) とくに S.149f. はポストモダンというコンセプトに対し、徹底された近代というコンセプトを対置して、後者を選ぶ。
 38. これとともに基礎にあって、しかしまさにパラドックス的な統一が解消

- されるということは、なお注目すべき仕方では説明されなければならない。
 なぜなら社会システムが、従ってコミュニケーションが問題となるときには、各操作は同時に観察（情報、伝達、理解の区別に関して）そして観察の観察可能な遂行としての操作である。類似的な概念の関係をわれわれはジョージ・スペンサー・ブラウンの形式計算にみる。： G. S. Brown, Laws of Form, 新版 New York 1979. —ここでは区別と指示の関係にみられる。そしてこの計算はここで同時に次のことを示す。すなわち、このはじめには注意されずに存在しているパラドックスが、計算の十分な複合性によって集められ、形式を形式の中へ再び取り込むという形で受け入れられるということ、そしてそれがどのようにしてかということが明らかにされる。治療的文脈でこの考えを利用するためには、そこでは長期にわたってパラドックスの再構築に興味をもたれていたのであった。以下を見よ。Fritz B. Simon, Unterschiede, die Unterschiede machen : Klinische Epistemologie : Grundlage einer systemischen Psychiatrie und Psychosomatik, Berlin 1988. 又次を参照。Jacques Miermont, Les conditions formelles de l'état autonome, Revue internationale de systématique 3 (1989), S.295-314.
39. これについては以下参照。Jacques Derrida, De l'esprit : Heidegger et la question, Paris 1987, 独訳 Frankfurt 1988, また多少単純な種類は、マルクス主義者が、最近まで“市民的”理論が資本主義を選択することを許さない、ということに関して彼等の驚きを表明していたようなもの。
 40. Gregory Bateson, Geist und Natur : Eine notwendige Einheit, Frankfurt 1982. S.122.
 41. Heinz von Foerster, Sicht und Einsicht : Versuche zu einer operativen Erkenntnistheorie. Braunschweig 1985.
 42. Niklas Luhmann, Erkenntnis als Konstruktion, Bern 1988 : ders., Die Wissenschaft der Gesellschaft, Frankfurt 1990.
 43. 標示する／標示しないという言語学的区別に関する定式化は、例えば John Lyons, Semantics Bd. 1, Cambridge Engl. 1977, S.305ff.
 44. これは容易にわかるように、“オートロギッシュ”に、自分自身を含める利害関心である。なぜならば、見ることができる／見ることができないという区別は、それによって見ることができないものを締め出す区別である。（これは、見ることのできないものを洞察することによって直ちに救われる救済にあまりに性急に期待することに反対する。心理学的文脈においてもそうである。治療的効果の問題について。）
 45. 数学からの例として、Heinz von Foerster a. a. O. insb. S.270ff. 科学システムへの適応についてはまた次を参照。Wolfgang Krohn / Günter Küppers, Die Selbstorganisation der Wissenschaft, Frankfurt 1989.

S.46ff., 134ff.

46. これについては論文“近代社会の固有価値としてのコンティンゲンツ”を見よ。
47. 例えば Ernst Cassirer, Substanzbegriff und Funktionsbegriff, Berlin 1910.
48. 参照, E. T. A. Hoffmann, Klein Zaches (1815作) は辰砂といわれる。
49. 断章2167番 Ewald Wasmuth版の算え方による。Fragmente II. Heidelberg 1957.